

## 令和4年度 2年次「史学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」事前登録

史学科の学生は、1年次後期に「史学導入演習Ⅱ」を履修し（火曜1限・金曜1限）、さらに、2年次前期に「史学基礎演習Ⅰ」、2年次後期に「史学基礎演習Ⅱ」を履修して、各コースごとに、分野・時代の研究方法の基礎を広く学んでいきます。

「史学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、少人数で行われる授業であり、事前登録制をとっています。下記の登録期間内に K-SMAPYⅡ上で希望を受け付けますので、希望する授業を4つ入力してください。あわせて、選考の参考にするため、現在関心を持っている研究について、参考文献を示した上で、具体的に400字以内で記入してください。

- ◆登録期間：令和4年1月8日(土)14：20～令和4年1月14日(金)12：50（厳守）
- ◆登録方法：K-SMAPYⅡアンケート機能より
- ◆登録内容： ①希望する授業を4つ選択（※下記、注意事項を参照のこと）  
②現在関心を持っている研究テーマ（400字以内）
- ◆結果発表：2月中旬（予定）

### 【登録画面上の注意事項】

- ☆ 希望科目の選択において、「第1希望」で選択した科目は、「第1希望」として扱いますが、第2～4希望で選択した科目の希望順位はすべて同順の「第2希望」として扱います。
- ☆ 上記「登録内容」の②は、「志望理由」の欄に入力してください。
- ☆ 登録期間内に事前登録を済ませなかった場合、希望通りに履修できない場合があります。
- ☆ 日曜日、1/10（月・祝）、冬期休暇中は事務室が閉室しているので、問合せの際は注意してください。

次年度の「史学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、次頁以下に記される授業が開講されます。履修に際しては、下記の条件があります。この条件に従って履修希望を出して下さい。

・「史学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」では、「史学導入演習Ⅰ・Ⅱ」で履修したコースと同一のコースを履修できる。なお、日本史学コースの場合は、「史学基礎演習Ⅰ」と「史学基礎演習Ⅱ」で異なる時代の演習を選択することが望ましい。

## 史学科履修ガイダンス

## 史学基礎演習 I

No.	コース・分野	担当教員	授業テーマ	備考
I-1	日本史学・古代史	山崎雅稔	飛鳥・奈良・平安時代の史料と研究	
I-2	日本史学・古代史	清武雄二	出土文字資料からみた古代日本の政治と文化	
I-3	日本史学・中世史	平野明夫	中世後期の政治・社会と文化を考える	
I-4	日本史学・中世史	杉山一弥	日本中世史研究の基礎をまなぶ	
I-5	日本史学・近世史	榎本 博	江戸時代の史料とくずし字の学修	
I-6	日本史学・近世史	種村威史	江戸時代の史料とくずし字の学修	
I-7	日本史学・近現代史	柴田紳一	吉田茂の書翰から学ぶ日本近代史	
I-8	日本史学・近現代史	吉田律人	名望家の日記から読み解く日本近代史	
I-9	外国史学・東洋史	江川式部	中国史のなかの女性と社会	
I-10	外国史学・東洋史	樋口秀実	広いアジアの歴史を学ぶ	
I-11	外国史学・西洋史	神長英輔	西洋近現代史へのアプローチ	
I-12	考古学	中村耕作	発掘調査報告書から先史時代人の行動・思考に迫る	
I-13	考古学	深澤太郎	考古資料論Ⅰ：編年論—遺構・遺物の「年代」—	
I-14	地域文化と景観	川名 禎	地図・絵図で読み解く『利根川図志』の世界	
I-15	地域文化と景観	橋村 修	歴史地理学と民俗学の接点—漁村・漁業を事例として—	

## 史学基礎演習Ⅱ

No.	コース・分野	担当教員	授業テーマ	備考
Ⅱ-1	日本史学・古代史	清武雄二	『延喜式』から読み解く古代の国家と社会	
Ⅱ-2	日本史学・古代史	佐藤長門	日本古代史入門	
Ⅱ-3	日本史学・中世史	海上貴彦	古記録入門	
Ⅱ-4	日本史学・中世史	矢部健太郎	室町・戦国・織豊期の古文書	
Ⅱ-5	日本史学・近世史	岩橋清美	江戸時代の史料とくずし字の学修	
Ⅱ-6	日本史学・近世史	種村威史	江戸時代の史料とくずし字の学修	
Ⅱ-7	日本史学・近現代史	柴田紳一	本学図書館の貴重書に学ぶ日本近代史	
Ⅱ-8	日本史学・近現代史	手塚雄太	日本近現代史の史料と論文を読む	
Ⅱ-9	日本史学・近現代史	内山京子	日本近現代史の史料と論文を読む	
Ⅱ-10	外国史学・東洋史	江川式部	唐長安と仏教	
Ⅱ-11	外国史学・東洋史	樋口秀実	広いアジアの歴史を学ぶ	
Ⅱ-12	外国史学・西洋史	神長英輔	西洋近現代史基礎演習	
Ⅱ-13	考古学	谷口康浩	入門 縄文時代の考古学	
Ⅱ-14	考古学	深澤太郎	考古資料論Ⅱ：機能論—人間が作って使って捨てたモノ—	
Ⅱ-15	地域文化と景観	吉田敏弘	伝統的景観と生態系を保全する	
Ⅱ-16	地域文化と景観	林 和生	古地図・絵図と現代地図から読み解く江戸・東京の歴史的景観	

## 授業内容（史学基礎演習Ⅰ）

日本史学・古代史	山崎雅稔
<p>この演習は、日本古代史をテーマにして、史料から事実を解き明かして研究を進めていくための手続きを身につけることを目指します。そのために、概説書や最新論文を読んで、論証と批判方法を学びます。また、実際の史料にふれて史料の読解の方法を学びます。日本古代史研究は、六国史や出土文字資料、金石文、律令格式・日記・儀式書、風土記や説話資料、さらには中国・朝鮮史料など、さまざまな史資料の分析をとおして、歴史にアプローチしています。演習ではその中から基本的な史資料をとりあげて、研究と史料解釈の可能性を一緒に検討していきます。</p>	
日本史学・古代史	清武雄二
<p>近年の日本古代史研究は、木簡や墨書土器といった出土文字資料の著しい増加により、文献史料のみでは明らかにし得なかった多様で実態的な古代史像が解明されつつある。また、韓国の出土木簡の調査事例が数多く紹介されることによって、列島における文字文化の受容とその展開、発展過程の研究が飛躍的に進展している。一方、考古遺物であるこれら出土文字資料の取扱いは、既存の文献史料とは異なる史料批判の方法をも加味した検討が必要とされる。本演習では、出土文字資料を東アジアの時代性・地域性といった視角から把握し、文字文化・文書行政全体から体系的に位置づけて理解することによって、列島の古代社会の歴史的特性とその展開を学んでいく。演習に際しては、具体的な木簡を取り上げて、その調査研究事例をなるべく数多く紹介するとともに、出土文字資料そのものの属性や形態・機能を十分に認識した研究方法を説明し、その習得を目指していく。</p>	
日本史学・中世史	平野明夫
<p>室町・戦国・織豊期の日記や古文書等を読み解きながら、史料読解の方法を身につけ、史料から何が明らかになるのかを考え、史料を基に中世社会を洞察することを学んで欲しい。そのために、史料読解の基礎を備えられるよう、史料を読むことを行う。</p>	
日本史学・中世史	杉山一弥
<p>日本中世（院政・鎌倉・南北朝・室町・戦国）における重要事項（政治、経済、法律、宗教、文化、合戦）を、一次史料の古文書・古記録から復元する技能を養う。 あわせて日本中世史研究でもとめられる思考・理論・規範の基礎をまなぶ。</p>	

日本史学・近世史	榎本 博
<p>江戸時代はそれ以前にくらべて、飛躍的に古文書が作成された時期である。そのため江戸時代を研究する上では史料に対する広い理解が必要になる。江戸時代が終了して150年以上が経過し、史料に出てくる単語・用語・文体は現代人にはなじみが薄いものになっている。まずこれに慣れる必要がある。また江戸時代の史料はくずし字と呼ばれる独特の書体で書かれている。翻刻されている史料は少なく、この読解も必要である。</p>	

日本史学・近世史	種村威史
<p>江戸時代はそれ以前にくらべて、飛躍的に古文書が作成された時期である。そのため江戸時代を研究する上では史料に対する広い理解が必要になる。江戸時代が終了して150年以上が経過し、史料に出てくる単語・用語・文体は現代人にはなじみが薄いものになっている。まずこれに慣れる必要がある。また江戸時代の史料はくずし字と呼ばれる独特の書体で書かれている。翻刻されている史料は少なく、この読解も必要である。</p>	

日本史学・近現代史	柴田紳一
<p>戦後日本の復興に寄与した吉田茂(1878-1967)は、その長く波乱に富んだ生涯を通じて数多くの手紙を書き遺した。主に戦前期には明治・大正・昭和の外交官として、戦中期には和平工作の推進者として、戦後期には宰相および宰相たちの後見者として、である。この演習では、①〈授業の進め方〉史料を読み進めながら報告を求め、②〈授業で重視するポイント〉史料を読む力や、文章作成・発表など表現する力を身につけることを基本にし、③〈学びのポイント〉徐々にステップアップしながら(毎回出席し回を重ねる中で)考え・調べ・読み・表現し、その進行・反復の中で学生には積極的な姿勢で授業に臨み、着実に「歴史を学ぶ力」を体得してもらいたい。</p>	

日本史学・近現代史	吉田律人
<p>個人が記した日記は過去の事象を知る重要な手掛かりとなる。本演習では、名望家の日記を読み、分析することで、近現代の史料を読み解く基礎的な技術や知識を学ぶ。名望家とは、政治や経済、文化活動を先導した地域社会の有力者である。具体的には、神奈川県橋樹郡生見尾村(現・横浜市鶴見区)の名望家であった佐久間権蔵の日記(横浜開港資料館編・発行『佐久間権蔵日記』)を使用し、明治末期～大正初期の地域社会の変化を読み解いていく。受講生には、日記を読むとともに、関連した論文、文献を調査した結果を報告してもらおう。なお、状況に応じてフィールドワークなども実施する。積極的な姿勢で授業に臨んでもらいたい。</p>	

外国史学・東洋史	江川式部
<p>中国史の史料及びそれに関連する概説・論文を読み、史実の読み解き方を学習していきます。具体的には、『隋書』列女伝を読みながら、当時の女性の生き方に映し出される歴史社会について考えていきます。中国の歴史史料には、女性について書かれたものはほとんどありません。従って、正史に残る「列女伝」は、とりわけ希少な史料ですが、行いが社会的に善しとされて史料に残され、後世に読み継がれた表層的な叙述の奥に、その人物の生きた時代や真実を見出すことは、不可能ではありません。史料のもつ二重性を考えつつ、歴史とは何かについて、考えてみたいと思います。</p>	

外国史学・東洋史	樋口秀実
<p>この演習は、中国・朝鮮古代史を除いたアジア史の諸問題について勉強しようという学生を対象とします。授業内容としては、①論文講読、②研究報告、③レポート執筆の3つを行ないます。①は、アジア諸国・諸地域の歴史に関する学術論文を読みます。「東洋史」というと「中国史」を連想しがちですが、この演習では、日中朝三地域を中心とする「漢字文化圏」に属さない、アジアの「横文字文化圏」の歴史に関する論文も読みます。②は、アジアの王朝や国家に関する報告をしてもらいます。③は、論文分析や報告内容に関わるレポートを数回書いてもらいます。①～③の作業を通じて、テーマを設定する、調査・分析を行なう、結論を導き出すといった論文執筆のために必要となる技術を身につけてください。なお、この授業は、皆さんの報告を中心に進められ、教員である私は、皆さんのアドバイザーとして脇役に徹します。授業のなかでいちばん大事すべき要素は、自分の感性にもとづき、自分の意見を自分の言葉で述べることです。うるさいくらいでかまわないので、積極的に授業に参加し、どんどん発言をしてください。</p>	

外国史学・西洋史	神長英輔
<p>この演習は、西洋史の研究を志す方を対象とし、自分が関心を持つ時代や地域の研究史と研究方法を学ぶことを目的とします。受講者は、西洋史を主題とした指定様式での研究発表（1人あたり2回以上）と毎回の授業での発言を義務とします。2回の発表では、参考書の『論点・西洋史学』（ミネルヴァ書房）を使って自分で問いを立てた上で、史料集の『世界史史料』（岩波書店）所収の史料を読み解いて、自分が立てた問いに答えを出してください。また、これとは別に、学期の初めには、西洋近現代史の基礎的な概説書としてソニア・ローズ『ジェンダー史とは何か』を講読します。</p> <p>なお、西洋史の研究を志す方は、英語文献を読む力をつけるため、2年次開講の外書講読Ⅰ・Ⅱを必ず受講してください。</p>	

考古学	中村耕作
-----	------

國學院大學は全国各地の膨大な発掘調査報告書を所蔵しています。発掘調査報告書は遺構・遺物のカタログであるとともに、発掘現場における個々の遺構・遺物の位置関係・出土状況を記録した原典資料でもあり、その記録を読み解くことで過去の人々の行動・思考に迫ることが可能です。この演習では、縄文時代を中心とした先史時代（旧石器時代～弥生時代）の各テーマ（住まい・ムラ・食料・技術・生産・交易・葬送・祭祀など）を考える上で重要な発掘調査事例を取り上げ、その調査成果をまとめた発掘調査報告書や、その資料を用いた模範的な分析論文を読み解いていきたいと思えます。具体的なテーマ・遺跡は受講者の関心に沿ったものを初回に相談して決定し、各回2名程度の発表をもとに、調査・記録の方法や分析の仕方について議論しながら進める予定です。なお、図書館が使用できない場合は、各テーマの代表的な論文を読み解くことに主眼を置いて進めます。

## 考古学

深澤太郎

考古学研究の前提は、モノの時期的（いつの？）・空間的（どこの？）位置付けを理解することです。そこで当演習では、弥生時代以降の遺構・遺物を取り上げて、それらの編年について考えていきます。具体的には、①編年論に関する講義を行った上で、②典型的な論文を購読して考古学者の思考法を理解していきます。その上で、③受講者にテーマを与えて演習発表を行う手順で進めていく予定です。テーマは、弥生時代・古墳時代をメインに考えていますが、初回授業時にアンケートを実施しますので、受講者の関心によっては、古代・中世・近世の資料についても触れていこうと思っています。

## 地域文化と景観

川名 禎

『利根川図志』とは、医師・赤松宗旦が著した江戸時代の地誌書である。本書は、越後魚沼の雪国の生活を描いた鈴木牧之の『北越雪譜』とも比較されることが多く、当時主流であった一国ごとの地誌とは異なり、利根川という自然環境を中心に、その流域の歴史・文化・民俗等を描写したところに特徴がある。また本書は、利根川を媒介として地域と地域とが結ばれ、あたかも「地中海世界」ならぬ「利根川世界」（利根川文化圏）が形成されていたことを窺わせるものでもある。さらに挿絵には多くの著名な絵師たちも参加している。

この演習では、地図や絵図などを使用しながら、『利根川図志』をテキストとして、受講生はそれぞれにテーマを選び、それに基づいた発表を行う。そのための文献検索の方法、論文の読み方、地図・絵図・景観の読解方法、レジュメの作成方法、口頭発表のやり方等について事前に指導を行う。本演習を通じて、「地域文化と景観コース」の学習と研究に必要なスキルを身につけたい。

地域文化と景観	橋村 修
<p>本演習は歴史地理学と民俗学の交差領域の研究方法を学ぶことを目的とする。受講者には、下記のような資料の分析と関係論文の紹介が課せられる。</p> <p>本演習で対象とする資料は、漁村・漁業やそれに関係する食文化に関わるもので、漁業関係の絵図や古文書、民俗誌などが挙げられる。具体的には、漁場図、江戸時代の魚便覧関係書、漁師日記、地誌書、民俗映像などの中から受講生の希望を踏まえ、演習の資料を決めていきたい。これらの資料を通じて、絵図や地形図、景観写真を読む視点を学ぶとともに、地理学、民俗学、その他関連分野の論文読解を進めることで、地域文化と景観コースで研究を進める上での研究方法を身につけていただきたい。</p>	

## 授業内容（史学基礎演習Ⅱ）

日本史学・古代史	清武雄二
<p>日本史研究の基本史料の一つである『延喜式』を対象として、古代史料を読解する上での基礎的な方法論を学んでいく。『延喜式』は古代国家の行政や儀式に携わる官人の業務マニュアル的な施行細則集であり、その内容は諸国の物産や生産技術といった諸分野に及ぶ。このため、歴史学にとどまらない広範な学問分野から注目されているが、膨大な分量と法制史料・編纂史料としての難解さから、その活用には一定の基礎知識と方法論が必要となる。本演習では、諸写本・版本による校訂といった基礎的作業をはじめ、諸制度や儀式、物品の生産・貢納といった多角的な視点を切り口として『延喜式』を読み解いていくことで、古代史料の基礎的な取扱い方を習得するとともに、史料が内包する豊かな情報を適切に引き出して活用する「読解力」を培っていきたい。</p>	
日本史学・古代史	佐藤長門
<p>この演習は、日本史研究をこころざす学生を対象として、基礎知識の習得をおこなうとともに、歴史を学ぶうえでの方法論を身につけることを目的とします。大学における歴史学とは、高等学校までの「暗記」中心のそれとは異なり、史・資料にもとづいてオリジナルな見解を展開することにあります。そのための初歩として、ここでは日本古代史関係の史料読解と利用のしかたなどを学び、基本的かつ重要な争点の考察を通して、歴史に対する柔軟な思考を得るよう努めることにします。なお授業には、必ず漢和辞典（出版社は問わない、電子辞書でも可）を持参してください。</p>	
日本史学・中世史	海上貴彦
<p>近年の平安時代～戦国時代の歴史研究にとって、古記録と呼ばれる漢文日記を史料として用いることは不可欠となっている。しかし、古記録を使いこなすためには、文体や用語法についての基礎的な訓練と慣れ、貴族社会についてのある程度の知識が必要である。そこで、この授業では、古記録の基礎知識を身につけるとともに、漢文日記を原史料とする編纂物である『百練抄（百錬抄）』の輪読を通じて、変体漢文（和風漢文体）の読み方、語句や内容の調べ方についての基本を学ぶ。</p>	
日本史学・中世史	矢部健太郎
<p>当演習では、戦国織豊期に時期を限定して史料読解の演習を行う。対象とする素材は、主に武家社会においてやり取りされた古文書とする予定である。ただし、中世社会の復元のためには、</p>	

多種多様な史料に関する理解が必要である。よって、公家衆や寺社が書き残した古記録などの史料の扱い方に関しても、十分に時間を割いて取り組んでいきたい。

日本史学・近世史	岩橋清美
<p>江戸時代はそれ以前にくらべて、飛躍的に古文書が作成された時期である。そのため江戸時代を研究する上では史料に対する広い理解が必要になる。江戸時代が終了して150年以上が経過し、史料に出てくる単語・用語・文体は現代人にはなじみが薄いものになっている。まずこれに慣れる必要がある。また江戸時代の史料はくずし字と呼ばれる独特の書体で書かれている。翻刻されている史料は少なく、この読解も必要である。</p>	

日本史学・近世史	種村威史
<p>江戸時代はそれ以前にくらべて、飛躍的に古文書が作成された時期である。そのため江戸時代を研究する上では史料に対する広い理解が必要になる。江戸時代が終了して150年以上が経過し、史料に出てくる単語・用語・文体は現代人にはなじみが薄いものになっている。まずこれに慣れる必要がある。また江戸時代の史料はくずし字と呼ばれる独特の書体で書かれている。翻刻されている史料は少なく、この読解も必要である。</p>	

日本史学・近現代史	柴田紳一
<p>本学図書館には寄贈・購入などによって収められたさまざまな貴重書(書籍や史資料など)が多数所蔵されている。その中には日本近代史に関わる重要なものが多数含まれている。身近にありながら日頃なかなか学生が目にするできないものがほとんどである。この演習では、①〈授業の進め方〉史料を読み進めながら報告を求め、②〈授業で重視するポイント〉史料を読む力や、文章作成・発表など表現する力を身につけることを基本にし、③〈学びのポイント〉徐々にステップアップしながら(毎回出席し回を重ねる中で)考え・調べ・読み・表現する、その進行・反復の中で学生には積極的な姿勢で授業に臨み、着実に「歴史を学ぶ力」を体得してもらいたい。</p>	

日本史学・近現代史	手塚雄太
<p>日本近現代史の史料は膨大かつ多種多様だが、そのなかでも当事者の行動記録である日記は極めて重要な史料である。とはいえ、日記を読みこなすためには、その他の史料の読解や同時代への理解が必要不可欠となる。本演習では、日記の内容を詳しく調べた上で、他の参加者が理解できる形で発表してもらうことを通じて、日本近現代史の研究方法を学ぶ。</p> <p>本演習では、戦前日本を代表する政治家の一人である原敬(1856-1921)が残した『原敬日記』を中心的に扱う。「平民宰相」と呼ばれた原の実像に迫るとともに、原の生きた時代について</p>	

て、政治はもちろん経済・社会・文化の動向も含めて理解を深めたい。なお、史料は報告終了後、全員で音読するので、予習は不可欠である。このほか、日本近現代史に関する学術論文を読むことを通じて、近現代史研究における最新の論点も学ぶ。履修者の希望によっては、海外での日本研究に関する論文なども講読の対象とする。

本演習を通じて、近現代史研究の基礎を学ぶとともに、3年生からの卒業論文に関わる演習を選択するための判断材料の一助として欲しい。

## 日本史学・近現代史

内山京子

個人の行動記録である近現代の日記は、時空を超えて書き手の世界を追体験することの出来る、極めて有効な手段である。しかしその一方で、日記は書き手の主観がそのまま反映された世界像でもあるため、適切に利用するためには知識と技術が必要である。この演習では、日記の語句・内容・背景について事典や論文などで調べて発表し、音読することで、近現代の史料の基礎的な読解力と分析力を身につけることを目指す。具体的には、維新三傑の一人である木戸孝允（1833—1877）が残した『木戸孝允日記』を中心的に使用し、語句を調べながら丁寧に読み進めることで、明治初期の政治家の問題意識について考えていきたい。全員で音読するため、報告者以外も予習は不可欠である。卒業論文の作成に必要な技術を身につけるため、積極的に取り組んで欲しい。

## 外国史学・東洋史

江川式部

中国史の史料及びそれに関連する概説・論文を読みながら、史実の読み解き方を学習していきます。具体的には、唐代長安の寺院記である『寺塔記』や、仏僧の伝記である『続高僧伝』などを読みながら、当時の仏寺と仏僧の諸相、また朝廷や諸外国との関係などを広く眺めてみたいと思います。信仰のよりどころとしてだけではない仏寺の様子を読み解きながら、当時の宗教をめぐる社会の様子について考えてみましょう。

## 外国史学・東洋史

樋口秀実

この演習は、中国・朝鮮古代史を除いたアジア史の諸問題について勉強しようという学生を対象とします。授業内容としては、①論文講読、②研究報告、③レポート執筆の3つを行ないます。①は、アジア諸国・諸地域の歴史に関する学術論文を読みます。「東洋史」というと「中国史」を連想しがちですが、この演習では、日中朝三地域を中心とする「漢字文化圏」に属さない、アジアの「横文字文化圏」の歴史に関する論文も読みます。②は、アジアの王朝や国家に関する報告をしてもらいます。③は、論文分析や報告内容に関わるレポートを数回書いてもらいます。①～③の作業を通じて、テーマを設定する、調査・分析を行なう、結論を導き出すといった論文執筆のために必要となる技術を身につけてください。なお、この授業は、皆さんの報告を中心に進められ、教員である私は、皆さんのアドバイザーとして脇役に徹します。授業のなかでいちばん

大事すべき要素は、自分の感性にもとづき、自分の意見を自分の言葉で述べることです。うるさいくらいでかまわないので、積極的に授業に参加し、どんどん発言をしてください。

外国史学・西洋史 (西洋近代・現代史)	神長英輔
<p>この演習は、西洋史の研究を志す方を対象とし、自分が関心を持つ時代や地域の研究史と発展的な研究方法を学ぶことを目的とします。受講者は、西洋史を主題とした指定様式での研究発表（1人あたり2回以上）と毎回の授業での発言を義務とします。1回目の発表では、『論点・西洋史学』（ミネルヴァ書房）、2回目は自分で入手した学術論文を、それぞれ参考書として使って自分で問いを立てた上で、史料集『世界史史料』（岩波書店）所収の史料を読み解いて、自分が立てた問いに答えを出してください。また、これとは別に、学期の初めには、西洋近現代史の基礎的な概説書としてピーター・パーク『文化史とは何か（増補改訂版第2版）』を講読します。</p> <p>なお、西洋史の研究を志す方は、英語文献を読む力をつけるため、2年次開講の外書講読Ⅰ・Ⅱを必ず受講してください。</p>	

考古学	谷口康浩
<p>世界文化遺産への登録にみられるように、自然と共生しながら1万年以上にわたって持続可能な社会を維持した縄文文化にいま注目が集まっています。この授業では、縄文人の残した遺跡・遺物を通して縄文文化への理解を深めるとともに、考古学の資料の見方や研究法を学びます。『入門 縄文時代の考古学』（2019年、同成社）を教科書に使用し、本書全章の講読・解説を通して縄文時代の考古学を基礎から学んでいきます。教科書の目次を参考に示します。序章：縄文への関心、第1章：縄文時代の枠組み、第2章：進歩する研究法、第3章：縄文時代の日本列島と生態系、第4章：縄文人の生態、第5章：縄文人の技術力、第6章：縄文時代の社会、第7章：縄文人の心と世界観、第8章：縄文文化の終末、終章：縄文時代史と歴史観 また、導入として本学博物館に展示されたさまざまな縄文時代遺物を見学し、それらの資料から何を知らることができるのかを考えます。</p>	

考古学	深澤太郎
<p>考古資料（遺跡・遺物）は、一体どのような目的で作られ、どのように使われたのでしょうか。その意図を解明する糸口は、遺構の様態や、遺物の精緻な観察から窺い知ることができます。そこで当演習では、主に弥生時代・古墳時代の遺跡・遺物を取り上げて、考古資料の意義を明らかにするための研究方法について考えていきます。具体的には、①機能論に関する講義を行った上で、②典型的な論文を講読して考古学者の思考法を理解していきます。その上で、③受講者にテーマを与えて演習発表を行う手順を進めていく予定です。当時の生活道具や、生活・政治・葬送・祭祀の場などを取り扱う予定ですが、初回授業時にアンケートを実施しますので、受講者の関心によっては、古代・中世・近世の事例についても触れていこうと思っています。</p>	

地域文化と景観	吉田敏弘
<p>次第に失われつつある伝統的な景観は、過去における社会生活や文化を追体験することができる貴重な歴史遺産です。これらを後世に伝えるために推進されているユネスコ世界遺産や文化庁の伝統的建造物群保存地区・文化的景観など、世界や日本で取り組みが進められている景観保全の事例について、その選定に際して作成された報告書類、研究論文や絵図などの史料、現状を記録した精密な地図類などを駆使して、その景観の価値を明らかにし、後世に伝えるためのさまざまな取り組みについて学びます。受講生は必ず景観保全地区一つを選び、その景観に関するさまざまな資料を収集し、調査した内容についてパワーポイントを用いた発表を行います。発表までの調査については、授業外での個人指導を行います。文献検索法や文献の読解力を身につけるとともに、絵図・古地図や地形図・空中写真、風景画や景観写真などの活用法についても指導します。また、希望者には、岩手での小区画水田保全活動（田植・稲刈ツアー）に参加し、景観保全を実践してもらいます。</p>	

地域文化と景観	林 和生
<p>過去の人々の生活は文字史料や古地図・絵図、絵画に記録・表現されています。地図の歴史は文字より古く、文字を持たない社会でも生活に必要な様々な情報を地図・絵図に描いて蓄積・共有して、日常生活に活用したり、地図で互いの意志の疎通をはかったり、また自分たちの世界観を地図・絵図に表現してきました。</p> <p>古地図や絵図には、それらが作られた時代の知識や情報が凝縮して表現されているので、それらを解読することで、作成された時代の歴史や社会の特徴を知ることができます。また、過去の人々の世界観や地理像を知ることでもできます。演習では、近世末に刊行された江戸切絵図の読解を通して江戸・東京の都市空間の特徴を考えます。具体的には、最も売れた尾張屋板の江戸切絵図（32枚構成）を受講生は1枚ずつ担当して、絵図に描かれた範囲の地域を実際に歩きます。そして現代図との比較から現代に残る江戸の歴史的景観（道路や橋・坂道、土地や町の区画、建物、神社・寺院、庭園・緑地、大名屋敷の位置・地形など）を探し出し、さらに絵図に描かれた範囲での江戸末期～明治～大正～昭和～平成の間の都市景観の変化の特徴について資料を作成・配付して順に報告します。</p> <p>また教室で古地図や明治・大正期の古い地形図上で地名、土地利用、景観などを手がかりに、地表に刻まれた歴史の痕跡を見つけ、それを生み出した人々の営みや意図を読み取る作業もおこないます。さらに、休日などを利用して古地図や地形図を携えて大学の周辺を一緒に歩いて渋谷の成り立ちを考えたり、東京区内・近郊に出かけて地形や歴史的景観を観察する「ブラタモリ」的エクスカージョンも行います。</p>	